

論考●特集●里山

# 里山とたたら製鉄

海老澤 衷 (早稲田大学文学学術院教授)

Tadasbi EBISAWA



1948年東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、大学院文学研究科修士課程、博士後期課程進学。大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員、早稲田大学文学部専任講師、助教授を経て、95年同教授、現在に至る。2012年～2014年早稲田大学文学学術院副学術院長、大学院文学研究科長、総合人文科学研究センター所長。2014年から早稲田大学研究院副院長、文化審議会専門委員(文化財分科会)を務める。日本の荘園史研究から出発し、東アジア水田開発史、村落景観論に関心がある。著書に『荘園公領制と中世村落』(校倉書房)などのほか、最近の共編著に『中世の荘園空間と現代——備中国新見荘の水利・地名・たたら』(勉誠出版)がある。



図1 新見荘の領域と大成山遺跡(国土地理院「地理院地図(電子国土web)」をもとに作成)

## 「もののけ姫」と歴史学者網野善彦氏

もう20年近く前のことになるが、宮崎駿監督のアニメーション映画に『もののけ姫』という作品があった。劇場公開とともに大変な評判となり、多くの人が映画館に足を運んだ。またテレビでも繰り返し放映されたの

で、最近の大学生でもほぼ全員がそのストーリーを知っている。歴史的眞実ではないにしても、日本中世(それも戦国時代)を背景にして、大人が見ても引き込まれるリアリティーがあり、専門の研究者の間でもさまざまな論評が行われた。それもそのはずで、20世紀後半の歴史学界に大きな影響を与えた網野善彦氏の歴史観をストレートに反映しており、多くの研究者(歴史分野のみならず他分野も含めて)が議論の場に参加した。劇場公開の際に頒布された「もののけ姫」のパンフレットには網野善彦氏が語ったページがあ

り、それには『「自然」と「人間」、二つの聖地が衝突する悲劇』というタイトルが付されている。『もののけ姫』はストーリーの展開が早く、そのあらすじを追うことは容易ではないが、このタイトルにより誰でも物語の仕組みを把握できることになる。網野氏の歴史観とそれを具現化した宮崎氏の才能には今もって驚嘆せざるを得ない。「自然の聖地」はサンという山犬に育てられた少女によって象徴され、「人間の聖地」はエボシゴゼンという白拍子風の女性によって率いられている。両者は一騎打ちをも辞さない闘志を有していて、

それぞれに率いられた動物と人間が入り乱れての決戦を挑む。自然と人為との戦いなのである。その背景として天長様のいる京都があり、天長様と現地を結ぶ曰くありげな山伏やアサノ公方という大名も登場する多彩なキャストである。場の設定が明快であり、パンフレットによれば山陰地方にそのモデルがあるという。さらに東北の白神山付近から呪いの謎を解こうとしてやってきたアシタカという好青年が、生死をかけたラブストーリーを展開させつつ、問題解決に向かって努力するのである。そこには現代社会が直面している人類のサスティナビリティが投映されていた。

このような壮大な物語の中心にタタラ場がある。エボシゴゼンに率いられた集団は、上質の鉄を生産し、牛を輸送手段としてシシガミの森という深い自然林を越えて市場まで運び、そこで米などの生活物資に交換して日々の集団生活を維持している。鉄生産の拡大にともなって自然林は破壊され、人為と自然の深刻な対立となるのである。

## 中世荘園における鉄年貢の貢納

中国地方には実際に鉄を年貢として供出する中世荘園があった。砂鉄を産することで知られている伯耆国ほうぎのくにや出雲国に近接する備中国びつちゅうのくにに存在した新見荘である(図1)。この地は、現在の岡山県新見市にあたる。瀬戸内海に注ぐ高梁川たかはしがわの上流域であり、砂鉄包含層が広く分布し、たたら製鉄が盛んに行われた地域であった。人文地理学の研究成果によれば、鉄穴流かんなしという技法により大規模な砂鉄採取が行われたため、前近代において大きく地形が変化していることが明らかにされている。備中国新見荘は、本家が最勝光院、領家を小槻家として平安時代末期に成立した。最勝光院は建春門院滋子の御願により法住寺殿という後白河法皇の壮大な

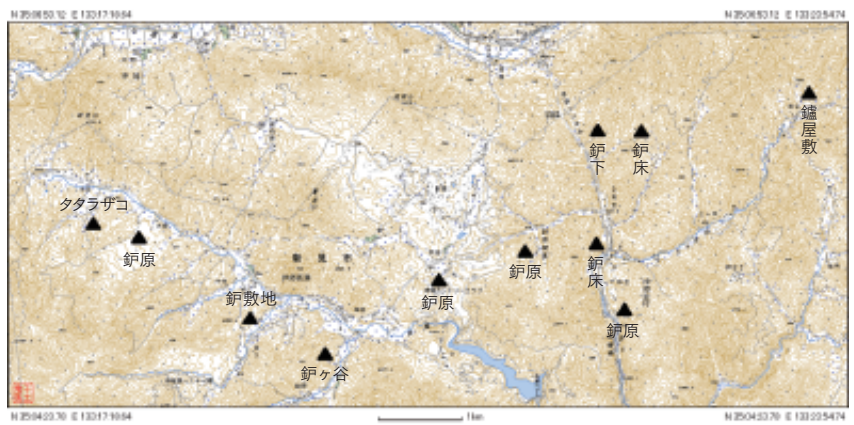


図2 高瀬・釜のたたら製鉄にかかわる地名(電子国土webをもとに作成)

宮殿の中に建立された寺院である。滋子は短い生涯ではあったが、後白河法皇に愛され、高倉天皇を生み、平氏の全盛期を現出したことでも知られている。このように最勝光院は華麗な建春門院の生涯を彩る寺院であるが、鎌倉時代になると堂宇も寺領も維持が困難となり、空海創建の東寺に預けられた。東寺では最勝光院方という部局を置いて管理することとなった。もともと新見荘は在地の開発領主大中臣氏によって、実務官僚的な貴族である小槻氏に寄進されたもので、それがさらに最勝光院に寄進されたものである。大中臣氏は公文となって現地を支配したが、最近の研究で製鉄に関わっていることが解明されている。領主の小槻氏は鎌倉時代前期に「修理東大寺大仏長官」に任命されていたことが知られ、この氏族はもともと鉱物資源にも関心があったらしい。

新見荘では文永8年(1271)に領家による大規模な検注が行われた。このとき作成された「新見荘惣検作田目録」によれば、98町9段ほどの現作水田が計上されている。したがって、当時この荘園全体で100ヘクタールを越す水田で作付けが行われていたことがわかる。さらに年貢徴収をみると、その筆頭には

吉野村田五町四段三十代 分鉄二百七十三両 段別五両とあり、水田1段に5両(約200グラム: 詳細な数値は算定不能だが、古

代中世の一般的な算定状況から1両約40グラムで換算)の鉄が年貢として賦課されていることがわかる。この吉野村は現在の高瀬と呼ばれる地区であり、高梁川の支流である西川の上流域にあたる場所である。この検注の担い手は公文の大中臣重孝であり、他に預所代と田所代も判をしており、さらに領家からの御使いもこれに加わっていた。地頭の判は得られず、今後の問題を残したものの、領家は壬生流と大宮流に分かれて係争中ではあったが、荘園経営には積極的な姿勢を見せていた。

この地で、「タタラ場」はどのように存在していたのであろうか。その手掛かりの1つが図2である。これは現在の高瀬と東隣の釜地区に存在する「たたら」という地名を拾ったものである。「釜」、「鉦」などのつく地名が10箇所ほど確認できる。たたら製鉄の痕跡を濃厚に示しているといえよう。

## 公開実験によるたたら製鉄

鎌倉時代末期には、後醍醐天皇がこの新見荘を東寺に寄進し、南北朝期以降戦国時代まで東寺の荘園として存続した。中世の新見荘が所在した岡山県新見市は、荘園の伝統を大事にしており、JR伯備線の新見駅前には15世紀における東寺の代官と荘官の一族であった女性の銅像が立てられている(図3)。さらに、たたら



図3 新見荘に生きた女性たまたまの銅像

ら製鉄の実験施設を作って公開実験を行っており、この火入れ式には東寺長者が立ち会い、多くのボランティアが手動の送風装置を徹夜で動かして銚<sup>すく</sup>あるいは鋤<sup>ひら</sup>と呼ばれる原料鉄を作っている。この公開実験のリーダーである藤井勲氏は、新見庄中世たたら伝承会を率いて、木炭と砂鉄の調達から実験の成否に重要な影響をもたらす炉床作りなど、実験全体の差配を行っている。日本美術刀剣保存協会が鳥根県安来市で国庫補助事業によりたたら製鉄を行っているが、日本刀の素材となる良質な原料鉄を作るため、製造過程は非公開となっている。ここには村下<sup>むらげ</sup>と呼ばれるたたら製鉄の指導者がいて、伝統的な技法を現在に伝えている。新見庄中世たたら伝承会はこの村下から伝統的な技法を伝授され、毎年実験を繰り返しているのである。また岡山県古代吉備文化財センターに勤務する上椋武氏が実験をデータ化して報告書の作成などを行っている。このような復原実験によってたたら製鉄の実態が解明されてきた。1回の実験で約600kg程度の鋤と呼ばれる原料鉄が生まれる。このような実験によれば、たたら製鉄は基本的に村下と呼ばれる1人の専門家の指揮の下で、多くの労働力と物資を集約することによってできるものであることが確かめられる。

弘安7年(1284)12月に作成された新見荘官物等徴符案という史料によれば、国貞名の名主は所当鉄13両

2分と分鉄9両3分の貢納が義務づけられていた。前項で検討した史料によれば水田1段について5両の貢納が義務づけられており、所当鉄はおそらく名田に賦課されたものであり、分鉄は国貞名の場合、「正作分田」にかかるものと推定されるので、領主直営の水田のなかで国貞名主に割り当てられた鉄であったと考えられる。1人の名主が合わせて22両5分の鉄の貢納を請け負っていたことがわかる。最終的にどのような製品を目指す鉄が求められていたのかは不明であるが、880グラム前後のものであったと推測される。おそらくこれは当時の名主たちにとって法外な負担ではなく、多少無理はあっても日常生活の中で負担できるものであったのであろう。

### 「タタラ場」の実態を示す大成山遺跡と名主たちのたたら製鉄

前述のように新見荘内吉野村で鉄年貢が貢納されていた。吉野村はやがて高瀬と呼ばれるようになり、現代に至っているが、先に指摘したように「たたら」という地名はこの地で多く残存している。また、砂鉄包含層の露頭をこの高瀬の地で視認することができ、地域内においてたたら

ら製鉄が行われていたことは確実であるが、現在のところ明確な遺跡は確認されていない。しかし、隣接する神代郷(この地の人々と新見荘の荘官や農民が頻繁に行き来していたことは東寺文書によって確かめられる)の油野<sup>あぶら</sup>には鎌倉時代から江戸時代に至るたたら施設が存在したことが知られる。現在、その遺跡の多くは湖底に沈んだが、良好な遺構がダムサイトに移されて保存されている(図4)。全体が大成山遺跡と呼ばれているが、広域に及ぶ複合遺跡で、鎌倉時代から近世末期まで確認できる非常に息の長い遺跡である。谷あいには存在するが周辺では水田耕作も行われていたところであり、周囲の村落から隔絶した立地では決してなかった。ダムの減水期には周囲の山肌が露わになるが、それらは砂鉄包含層で成り立っており、砂鉄採取の適地であったことをうかがわせる。特に近世には高殿と呼ばれるような大規模な遺跡が確認され、周囲は雑木林の山並みとなっており、炭焼きの適地でもあることがわかる。したがって、まったく人跡未踏の地ではなく、里山という表現が当てはまる場所に存在するのである。

前項の実験結果と大成山遺跡の立



図4 大成山遺跡(湖底から山稜に広がる)

地を考慮すると、13世紀の後半、名主とその配下の農民は次のようにして鉄年貢に関わる生産と貢納に従事していたのであろう。

(1) 秋の収穫後における砂鉄の採取。小谷の沢の側面にある砂鉄包含層の露頭の掘り崩し、用水溝に溜まった砂鉄を掬い上げる。小規模な水田開発によって生じた廃土からの砂鉄採取も行う。

(2) いったん名主のもとに集められた砂鉄は牛馬によってたたら工房予定地へと運ばれる。各工房には木炭が集積され、たたらが設置されて火入れが行われ、操業が開始される。

(3) 古老的立場にあるエキスパートが金屋子神(図5)に祈りつつ、たたら内の状況を判断して木炭と砂鉄の投入を指示し、鉄製品の仕上がりを予測する。

(4) 純度が一様ではない1次製品が解体され、近くの鍛冶工房に運ばれて用途別に仕分けられ、再度加熱して純度を高めた後、名主に渡され、貢納品や市場売却に分けられる。

## たたら製鉄の特性

たたら製鉄は、鍛冶や鋳物師の歴史とは違った道を歩んできたと考えべきである。小規模な生産は古代から行われていたが、中世においては、中国地方において豊富な砂鉄を背景として荘園制の生産システムに取り入れられ、貢納される状況が生まれた。ここでは荘園年貢を請け負った名主が水田農耕と並行してたたら製鉄を行っていたのである。このように日常生活の中で長くたたら製鉄が営まれ、中世の後期には鉄を扱う商人が高梁川上流までやってきて鉄を買い付け、他国の鋳物師や鍛冶に供給する状況が生まれていた。このようなくろがね商人は市場のみならず生産現場にも現れて為替取引を行って現物を運び出すこともあったと考えられる。日本ではこのように比較的安定した生産と流通が存在したた

め、鍛冶工房でも職人の練度が上がり、武器や武具なども質の向上が見られたのであろう。中世において武器や武具が大量に輸出された背景はこのようなところにある。ただし、中世において「たたら師」(仮称)は職人集団になり得なかった。

たたら製鉄は環境を大きく破壊することなく、日本の農耕社会に寄り添って行われてきたものであり、中世から長期間にわたって良質な鉄製品を供給し続けてきたが、明治から大正期にかけて絶滅状況となった。これはたたら製鉄と密接に関連する鍛冶職人が従来の伝統を受け継いで、近代社会でも長く命脈を保ったこととは対照的な位置にあるものであった。もともと鍛冶職人は、集団で行動し、技術を伝承することに存在意義があったといえよう。また、鍛冶職人同様に鉄製品(金属一般)を扱う職人として鋳物師があった。その系譜は古代以来、変貌を遂げながらも現在に至っている。それゆえ、中世から近世にかけて鍛冶や鋳物師は、時に、政治的な発言を行いうる場も確保できたといえよう。

## 近代の日本人はたたら製鉄のサスティナビリティを理解できなかった

『もののけ姫』に示されたタタラ場は長期的な展望を持ち得ず、一過的な、不安定な存在であったように印象づけられている。これは、たたら製鉄の実像を示したものとは言いがたい。しかし、われわれの意識の中には、このような「タタラ場」を受



図5 高瀬にある金屋子神社

け入れるバックグラウンドが広範に存在していたように思われる。それは、網野氏が提唱した非農業民的史観よりもさらに根深く存在するものであり、おそらく柳田國男が唱えた常民の外側にたたら製鉄を位置づけようとする潜在意識がわれわれの中に働いているからではなかろうか。なぜそのようになったのか。

近世末期、黒船の来航に象徴されるように、日本人は西洋文明の圧倒的な力を眼前にして、その移入こそ焦眉の急であることを思い知らされた。中心的な課題の1つに「鉄」の存在があったのである。当時、西欧に普及していた「反射炉」の移入に全力を上げ、大砲の製造に力を注いだ。「反射炉」は脱亜入欧の象徴的存在であったといえよう。その際、もはや捨て去るべきものと考えられたのがたたら製鉄であったのである。しかし、実際には、生産力の面で反射炉はたたら製鉄を凌駕するものではなかったものであり、明治20年代に入って高炉および転炉の普及によりようやく鋼鉄を作る近代的技術が確立したのであった。この間に、たたら製鉄は里山を背景とする主力の産業として存在したにもかかわらず、近代化を急ぐ日本人の意識の外に置かれ、日常性からは切り離されて考えられるようになったのであろう。